

中国の人と文化に触れて

経済学部 奥田 滯奈

3/8～3/15の8日間に渡る中国研修を終えた。中国の広州、香港そしてマカオを訪れた。

中国研修に参加することを決めたのは夏期キャンプでの先輩方の報告を聞いたからだ。それまで興味があった訳ではない中国にどこか惹かれた。中国と言えばここ最近急速に発展していること、また直前研修では支払いも現金ではなく、携帯で済ませるということを耳にしさらに関心が深まった。実際中国に行き、立ち並ぶ高層ビルに道路、地下鉄の整備など想像していた以上に発展していた。

初めての海外でカルチャーショックを受けた。一つは電子マネーの普及。中国では日本で言うLINEに似たアプリ Wechatに Wechatpay というものがあり、支払いが可能のため現金を扱う事があまりなく、財布も持たないという。現に現地の学生は現金の扱いに戸惑う事があった。

二つ目に食は広州にありというほど食にあふれているが、食文化でも違いがあった。中国の南の慣習だそうだが、飲食店でご飯を食べる際、最初にお皿をお湯で洗う湯煎というものがあった。また、お皿の使い方も違っていた。お皿の種類は小さいお椀と平たい小皿が出てくる。普通日本ではお椀にご飯、小皿におかずを盛りつけるが中国では取り皿は小さいお椀で、平たい皿は骨やティッシュなどのゴミを置くいわばがら入れである。以前 sns で見聞きし、半信半疑であったが現地の学生にそう説明され驚愕した。さらに運ばれてくるご飯も食べきれないほどの量が出てくる。もとより完食できるような量は作らないようだ。研修3日目は暨南大学の学生に広州を案内してもらった際に、飲茶を体験した。飲茶とは広東省、香港、マカオを中心に行われている習慣で中国茶を飲みながら食事を食べることだ。お茶を愉しむことが大事だと言う広東の文化で特に年配の方は飲茶でお話をしながら半日を過ごす人も居るといほど親しまれている。飲茶をしたのは初めての事で新鮮だったし楽しむ事が出来た。

中国研修のメインは現地学生との交流と言っていいだろう。暨南大学の南キャンパスでは日本語学部と国際学院の方々と交流した。日本語学部の方々は2年間日本語を学んでおり、日本人に会うのは初めてと言っていたが、流暢に日本語を話していた。4つの班に分かれ、自己紹介やゲーム、特技披露などで交流を深めた。私の班は全員女子で日本のアニメが好きと言う子が多く、自分が知らないようなアニメも見ていて日本を自分たちより知っているのではないかと思った。また日本のドラマは中国でも見られるらしく、アニメと同じように人気だった。日本人が思っている以上に日本の文化は世界から注目されているのだと感じた。国際学院の方にはキャンパスを案内してもらった。日本の大学に比べて何より広く、特に図書館が充実していた。図書館だけで7階ほどあり、各階に自習スペースが設けられていて、勉強する環境が整っていた。この交流で自己紹介を終えた後、軽なお茶の際に日本語以外の名前はるか、と聞かれた。その時は疑問に思ったが、マカオ大学の学生との交流でようやくその意味が分かった。中国人の名前は発音が難しく覚えにくいいため、中国の名前とは別にイングリッシュネームというのがあるらしい。よっぽど親しい関係でないと中国名では呼ばず、ほとんどイングリッシュネームで呼び合うとのことだ。日本では外国人との交流は少ないため、現地学生との交流は新鮮だった。話題は日本の文化以外にも学校生活や食事のときの会話など様々であったが、勉強の意識がかなり高いと感じ刺激を受けた。マカオ大学の学生は授業はすべて英語で行われ、母国語でない英語で理解しないとイケないことはストレスだと言っていた。しかし、母国語でない英語も堪能である彼らを目にし自分の英語の未熟さを実感した。

中国研修を終え、受けた刺激と満足感で満ちていた。今回を機に以前よりももっと勉学、特に英語に励みたい。そして日本の文化を海外に発信できるよう日本についてももっと知識を深めるよう努めていこうと思う。